

数量詞の追加によるアスペクト性解釈の変化

張 琴琴

(北海道大学大学院生)

1. 問題となる現象

日本語において、「ル形」は未来の意志動作、「テイル形」は進行中動作あるいは完了動作という対立が観察される。

- (1) a. 苺を食べる。 b. 苺を食べている。¹

そして、連体数量詞文 (2a) は既定的単位、連用数量詞文 (2b) は未定の単位を表すという両文の意味の違いが加藤 (2003) により明らかになっている。数量詞の移動 (遊離) という視点から奥津 (1983) では属性 Q と部分数量と解釈できると指摘されている。

- (2) a. 30 個の苺を食べる。 b. 苺を 30 個食べる。
(3) a. 30 個の苺を食べている。 b. 苺を 30 個食べている。

しかし、(2) と (3) の違いについてはまだ十分に議論されていない。そのため、本研究は数量詞の追加がアスペクト性の解釈に及ぼす影響を考察し、連体数量詞文と連用数量詞文の意味を比較することにより、アスペクト性解釈の変化のメカニズムを解明することを試みる。

2. アスペクトとアスペクト性

現代日本語において、「相 (Aspect)」は一般的にアスペクトと呼ばれる。このアスペクトは、働きの時間的局面的の取り上げ方を表す文法カテゴリーであり、一方でテンス (時制) は、事態を発話時との時間軸上の関係において位置づける文法カテゴリーであると日本語記述文法研究会 (編) (2007) で記述されている。日本語のアスペクトには語彙的アスペクトと文法的アスペクトが存在し、「テイル形」は典型的な文法的アスペクトである。また、アスペクトはアスペクチュアリティを表すための文法概念である。工藤 (2004) は、文中にえがきだされる出来事の時間的な内部構造をアスペクチュアリティと定義しているが、

¹ 本論に取り上げる用例について、出典を明記していない用例は筆者による作例である。

本稿では文法形式をアスペクトとし、それによって表される意味をアスペクト性 (aspectuality) と呼ぶこととする。さらに、アスペクチュアリティの種類については、文法形式が表す意味を文法的アスペクチュアリティ (grammatical aspectuality)、語によって表されるアスペクトを語彙的アスペクチュアリティ (lexical aspectuality) に細分化する研究 (山岡 2019) も見られる。

3. 先行研究

議論に入る前に、まず数量詞とアスペクトはこれまでどのように捉えられてきたかを概観し、その後、先行研究から見られる問題点を指摘する。

数量詞とアスペクトというテーマについて、初めて触れたのは矢澤 (1985) だと言える。矢澤は連用数量詞が動詞を表す動作・作用に関連した数量を表している視点から、達成量と同時量という概念を提案している (以下に引用した例文を平仮名表記にした)。

- (4) ピサの斜塔は 1950 年よりも 5 度程傾いている。
- (5) 車が 3mスリップした。
- (6) 世界記録を十秒三更新した。
- (7) 牛肉を 500g食べる。
- (8) 一キロ買ってきた牛肉を 500g食べる。 (矢澤 1985 : 97-98)

上記の例文について、数量詞は動作・作用に伴って増減し、その完了時に達成される数量 (仮に「達成量」と呼ぶ) を表していると (矢澤 1985 : 104) 述べられているが、ここではいくつかの問題が発生する。まず、「食べる」は消滅的な動詞であり、「傾く・スリップ・更新する」は状態を表す動詞である。そのため、連用数量詞と共に起る際にそれらを同様に扱うことができるか否かという問題である。そして、(8) のように、先行詞「牛肉」の量はすでに修飾節「一キロ買ってきた」により限定され、動作が完了時に達成される数量は精々1 キロしかない。これに対し、(7) の先行詞は特定の数量で限定されておらず、つまり、どのくらいの牛肉が存在するかを把握できていない状況下で 500g を食べるということになる。さらに、500g を食べた後に、肉の量を追加して食べることも可能だと考えられる。田中 (2022) では、(7) の 500g が「結果様態」として捉えられ、「動作が行われた後の状態・数量を表している」と説明されているが、「食べる」は「非過去 (テンス)」を表すため、動作を完了しない限り、結果となるか否かは容易に判断できないと思われる。例えば、「牛肉を 500g 食べる。その後、200g 追加して食べた」という文になると、動作「食べた」に伴う数量は「700g」に変更できる。そうすると、田中 (2022) で言う「結果様態」は、必ずしも動作完了時の結果を指しているとは限らない。数量詞とテンスにも関わって

いるという点について、矢澤（1985）も言及していない。

また、アスペクトを中心として数量詞について考察を行ったのは三原（1998、2004、2022）などが挙げられる。これについて、主に動詞のアスペクト的意味が連用数量詞文と密接に関連しており、結果状態を含意するアスペクト限定が連用数量詞文の成立要件であると主張している。

(9) 子供がおもちゃをもう2つ壊した。

(10) 彼はレンガを花壇に6つ積んだ。 (三原 2022:92)

三原は「壊す・積む」のような動詞を強影響動詞と名付け、この種類の動詞が描写する動作には必ず終了限界があると考えている。「この限界点において、動作の「結果」（状態変化または位置変化）が生じるということである。例えば、おもちゃを2つ壊すという動作は、壊し終わった時点で終了し、そして壊れた2つのおもちゃが現出する。これはすなわち、動作が限界的（delimited、完了的（telic）とも言う）であり、必然的に結果状態が現れるということである。強影響動詞は動詞そのものが限界的なのであり、数量詞は、動作の結果状態を数量的に補足していると言えよう」と三原（2022:92）で述べられている。つまり、ここでの結果状態は矢澤（1985）で提案された「達成量」と同じものである。では、「20個のミニトマトを食べた。」という連体数量詞文の場合、連用数量詞文と同様に、数量詞は「食べる」という動作の数量（達成量）と捉えられるだろうか。同じく捉えられない場合、両者の間にはどのような違いが生じるかという問題が残る。

4. 考察となる動詞の種類

日本語の動詞分類と言えば、まずアスペクトの観点から「状態動詞」「継続動詞」「瞬間動詞」「第四種の動詞」という4類型が金田一（1976）によって分類された。その後、アスペクトの研究が進むに連れ、この動詞4類型は奥田（1978）、工藤（1995、2014）、三原（2002、2022）などの研究者によって批判されてきた。本稿では、数量詞の有無がアスペクト性の解釈に影響を及ぼさない自動詞（例：遊ぶ、消える）、移動動詞（例：来る、歩く、泳ぐ）、存在動詞（例：ある、いる）を考察の対象外とした。数量詞の追加がアスペクト性解釈に影響を及ぼす動詞について、消滅系動詞、出現・作成系動詞に分類して説明できると考えている。

- ・ 消滅系動詞：動作主体の動作によって動作対象がなくなることを表す動詞（食べる、食う、飲む、消す、焼く、燃やすなど）。
- ・ 出現・作成系動詞：動作主体の動作によって動作対象が現れることを表す動詞（書く、

作る、握る、編む、建てる、彫る、炊くなど。

- (11) 友達が来ている。
- (12) 3人の友達がか来ている。
- (13) 友達が3人か来ている。

「来る」は典型的な移動動詞である。(11)の「友達」がすでに目的地に到着していると推測されるため、「テイル」は動作の結果状態を表すことができる。(12)(13)にそれぞれ連体数量詞と連用数量詞が付加されているにもかかわらず、「テイル」は同様な解釈を得る。

5. 連体・連用数量詞文におけるアスペクト性解釈の違い

加藤 (2003) では、存在数量を表す数量詞を存在数量詞 (3冊)、そうでないものを非存在数量詞 (120m) とされている。

- (14) a. 3冊の本を読んだ。 b. 本を3冊読んだ。
- (15) a. 120mの釣り橋を歩く。 b. 釣り橋を120m歩く。

(加藤 2003 : 442-445)

存在数量詞の場合では、連体数量詞は「既定的単位」であることを表し、連用数量詞 (加藤 2003 では「遊離数量詞」と呼ばれている) は「未定的単位」であることを表す。これに対し、非存在数量詞の場合、連体数量詞は「属性」、連用数量詞は「動作量」を表すと主張されている。張 (2024) は加藤 (2003) から示唆を受け、数量詞を特定数量詞、不特定数量、準特定数量詞の3つに分類し、それぞれに所属する数量詞が存在数量を表す場合、連体数量詞文において未定的単位と動作量を同時に表現できると指摘した。このように、数量詞構文について議論する際には、本来両者を分けるべきであるが、アスペクト性の解釈において顕著な差異が見られないため、本稿では特に区別せずに扱うこととする。これに関しては5.2節で詳述する。

5.1 消滅系動詞の場合

- (16) a. 30個の苺を食べている。 b. 苺を30個食べている。 (再掲 (3))

連体数量詞文の(16a)は、動作主体が「食べる」という動作を進行していることを示し、「テイル」が未完了の状態を表す。一方、連用数量詞文の(16b)は、「食べる」という動作が終了限界を超え、結果状態を示すため、「テイル」が完了と解釈される。具体的には、「30個の苺」という数量は、前者においては事前に存在する数量として認識され、動作が終了するとアスペクト性も完了に変わる。この場合、「30個」は動作の結果量としても捉えられる。しかし、連体数量詞文では、事前に存在する数量は「30個」しかなく、追加で食べることはできない。もちろん、苺がまだある場合、「30個の苺を食べた。また、5個食べた。」のように、「食べる」動作を続けることができるが、その際に動作の量が繋がらなくなる。「30個の苺を食べた。まだあるので、今31個目を食べている。」という文であれば、動作の量が連続的に累積できる。対照的に、連用数量詞文では「苺」の具体的な数量が不明であるが、少なくとも30個以上あると推測されるため、「30個」は動作の結果数量と解釈される。この場合、「苺を30個食べている。あまりにも美味しいので、また5個食べる。」のように、動作主体が継続的に動作を行うと、「30個」に対する動作が完了し、追加の「5個」を食べ終わると、「食べる」動作も完了を表す。そうすると、動作の結果量は最初の30個を超え、35個に達する。つまり、連体数量詞文における未完了の「テイル」は動作の終了によって完了に変わり、連用数量詞文の完了の「テイル」は終了した動作の量が増加していく。すなわち、全体的にアスペクト性が随時数量詞の追加によって変化する。これは、苺の数量が不明であるため、動作主体が無限に動作を続けることが可能であると考えられる。図に示すと以下のようなになる。

連体数量詞文の場合：30個の苺を食べている。

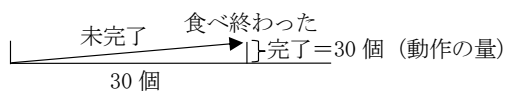


図 1

連用数量詞文の場合：苺を30個食べている。

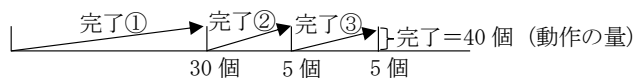


図 2

5.2 出現・作成系動詞の場合

冒頭で数量詞が事物の存在数量を表すか否かがアスペクト性の解釈に大きな差をもたらさないと述べたが、ここから具体例を挙げて説明する。

- (17) a. 2本の論文を書いている。 b. 論文を2本書いている。

目的語「論文」に対し、「2本」は(3)の「30個」と同様に存在数量詞であるが、異なる点は、30個の苺が実際に存在しているのに対し、2本の論文は動作主体の頭の中のみ存在することである。つまり、後者は動作主体が動作を行う前に設定した目標数量である。本稿では、このような数量を「事前存在目標数量」と呼ぶこととする。(17a)では、2本の論文を1本ずつ書くことや、同時に書くことが想定でき、どちらも完成していない場合は未完了となり、すべて完成した場合には完了の意味となる。しかし、「2本の論文を1本書いている。」という文となると、目標数量に対する「書く」動作が完全に終了していないものの、全数量の中の一部分は完了となっていると見なさざる得ない。なお、この文には連体数量詞と連用数量詞が同時に存在するため、同じように扱うことができないことに留意されたい。この現象については、今後詳しく議論したい。連体数量詞の(17a)においても、動作が終了すればアスペクト性は未完了から完了に変わり、「2本」は動作の結果量として捉えることができる。また、「今、2本の論文を書いている。でも、書きたい内容があつて、もう1本の論文を書くことにした。」のように、論文を書くことを現実には続けることができるが、その場合は最初の命題内容が偽となり、発話者の認識が間違っていたと言わないと成立しにくい。この点は消滅系動詞と明らかに異なる。

一方で、連用数量詞の(17b)では、論文を2本書き終えたことから、「書く」という動作が終了限界を超え、結果状態を示していることが分かる。この場合、「テイル」も完了と解釈できる。しかし、(3b)でも見たように、連用数量詞は未定の単位を表すため、論文の総数量が把握できない。そうすると、「論文を2本書いている。時間の余裕があつて、短編論文も1本書く。」のように、追加で書くことが可能である。したがって、この場合では、出現・作成系動詞は消滅系動詞と同様に、アスペクト性が数量詞の付加によって変化することが解釈できる。

- (18) a. 10頁の論文を書いている。 b. 論文を10頁書いている。

「10頁」について、研究者によって定義が異なり、奥津(1983)では属性Q、加藤(2003)では非存在数量詞とされている。本稿では「属性数量」と呼ぶこととする。(18a)の「10頁」は事前に設定された数量(事前存在目標数量)であり、「書く」動作が終了しない限り、「10頁の論文」は存在し得ない。そのため、属性数量も(17a)の論文の存在数量とほぼ同じ意味で解釈される。例えば、「私は10頁の論文を書いている。今書くことがたくさんあつて、11頁目を書いている。」と言えるが、これは動作主が最初に設定した既定的単位と矛盾する。すなわち、10頁の論文は10頁以内でなければならず、完成状態で10頁である

必要がある。さらに、「私は10頁の論文を書いた。でも、量が増えたので、16頁の論文になった。」と言うこともできるが、その時点で「10頁の論文を書いている。」とは言えなくなる。16頁になる場合、発話者がすでにそれを認識しているため、その時点で「10頁の論文」は書かれていないわけである。つまり、動作主の認識が変わると、連体数量詞文における事前目標数量は偽となり、会話としては成立しなくなる。しかし、アスペクト性解釈において、属性数量の「10頁」は存在数量を表す「30個」「2本」と同様である。

5.3 証拠性について

本節では、証拠性の有無という観点から (3) (17) (18) を改めて見ておく (例文の再掲は省略する)。前述の通り、(3a) の「30個の苺」は実在し、動作主による動作が終了する時点で、苺の量が減少し、どのくらい食べたかをすぐに確認できる。このことから、消滅系動詞の場合、連体数量詞は証拠性を持つと言える。一方、(3b) の「テイル」は動作の結果状態を表すため、30個食べ終わったという証拠が存在し、証拠性を持つと考えられる。これに対し、(17a) (18a) の「2本の論文」「10頁の論文」は、動作主の頭の中でのみ存在する事前数量であり、未来の予定を示している。要するに、動作が終了するまで、その論文は実物として現れることはない。このことから、連体数量詞は本来証拠性を持たないと解釈できる。一方、連用数量詞文における「テイル」は、(3b) と同様に動詞の結果状態を表し、論文の量を直接確認できることから、証拠性という特徴を持つと推測される。

上記のことをまとめると、表1のようになる。

消滅系動詞の場合	連体数量詞	証拠性を持つ
	連用数量詞	証拠性を持つ
出現・作成系動詞の場合	連体数量詞	証拠性を持たない
	連用数量詞	証拠性を持つ

表1

6. 結論

一般的に、数量詞が欠如している文に連体数量詞を追加する場合、未完了の解釈および完了の解釈が可能となる。一方、連用数量詞を追加する場合では、通常は完了の解釈が成立する。ただし、これは完全に動作が完了したという意味でなく、部分的に完了したことを示しているに過ぎないということが明らかになった。また、証拠性の観点から、消滅系動詞の場合、連体数量詞および連用数量詞は証拠性を持つが、出現・作成系動詞の場合では、連体数量詞は証拠性を持たず、連用数量詞のほうが証拠性を持つことが確認された。本研究の結果は、従来のアスペクト性に関する研究を精緻化することに寄与するものであ

ると考えられる。

参考文献

- 奥田靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐって (上) (下)」『教育国語』53号-54号。
- 奥津敬一郎 (1983) 「数量詞移動再論」『人文学報』160号、pp. 1-23.
- 奥津敬一郎 (1996) 『拾遺日本文法論』ひつじ書房。
- 加藤重広 (1997) 「日本語の連体数量詞と遊離数量詞の分析」『富山大学人文学部紀要』26号、pp. 31-64.
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房。
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房。
- 工藤真由美 (2004) 「ムードとテンス・アスペクトの相関性をめぐって」『阪大日本語研究』16号、pp. 1-17.
- 工藤真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房。
- 金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むき書房。
- 金水敏 (2000) 「時の表現」『時・否定ととりたて (日本語の文法2)』(仁田義雄・益岡隆志 (編))、pp. 1-92.
- 田中佑 (2022) 「名詞「試合」の助数詞への用法拡張」『日本語文法』22巻2号、pp. 20-36.
- 張琴琴 (2024) 「日本語数量詞種別による意味用法の分析」北海道大学国語国文学会『国語国文研究』第162号、pp. 16-35.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2007) 『現代日本語文法3 アスペクト・テンス・肯否』くろしお出版。
- 三原健一 (1998) 「数量詞連結構文と「結果」の含意【上】【中】【下】」『月刊言語』6月号-8月号。
- 三原健一 (2002) 「動作類型とアスペクト限定」『日本語文法』2-1、pp. 132-152.
- 三原健一 (2004) 『アスペクト解釈と統語現象』松柏社。
- 三原健一 (2022) 『日本語構文大全 第I巻 アスペクトとその周辺』くろしお出版。
- 矢澤真人 (1985) 「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」『学習院女子短期大学紀要』23、pp. 96-112.
- 山岡洋 (2019) 「英語の進行形が表す含意に関する一考察」桜美林論考『言語文化研究』第10号、pp. 49-69.

〈付記〉稿を成すにあたり多くのご教示を賜った加藤重広先生に深く御礼申し上げます。文責はすべて筆者にある。なお、本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2119 の支援を受けたものである。